

》 隨 筆 《

水 と 湯

大 友 一 夫*

憲法記念日と国民の休日という意味不明な連休は診療に従事して、5月下旬にレンタカーで八甲田、岩木山、八幡平を旅した。

雨上がりの快晴に恵まれ、東北の花は一斉に開花し始めた。今年は長い冬だったという。

残雪の照り返しとブナの若葉に包まれると、体の精気が躍動し、温気に上せるほどになる。ムラサキヤシオの点在する奥入瀬溪流、水芭蕉の咲く湖沼群など、雪解け水に出会うとその火照りが鎮まるのだ。

岩木山中腹に湧く「ぶなの泉（しずこ）」を飲み干すと、目だけでなく、腹にまでブナが染み込んでくるようだ。最近では秘湯だけでなく、名水を旅に組み込んでいる。岩木山神社にも名水があった。御手洗（みたらし）場の水は、人の高さほどのところから勢いよく三方向に吹き出している。神社の禊所でもあるが、そのスケールは圧巻であった。その昔から営々と禊が行われて来たのであろう。ここの主祭神は顕国魂神（うつつくにたまのかみ）である。顕国魂神とは、医薬の神様と称される大国主命のことである。この神は、ある事情で出雲から津軽に左遷されたことが古伝『秀真伝（ホツマツタエ）』に記載されている。

『秀真伝』には、「心を明かす歌の道、禊の道は身を明かす」とある。心を健やかにするのは和歌であり、体を健やかにするのは禊であるというのである。

医薬の神に参拝した後、岩木山を背景にリングの花を撮影したりして、その日の宿は、八幡平大沼の湖畔に取った。大沼の周囲には、リュ

ウキンカ、ショウジョウバカマ、キクザキイチリンソウなどが、仲良く水芭蕉と同居していた。沼を眺めながら入る露天風呂は格別であった。学生時代、露天風呂を探すのに苦労したものであるが、今では隔世の感がある。この温泉は単純泉で、肌に柔らかい。単純泉は固形成分が少ないが、多ければ効果が高まるというものでもない。前日泊まった十和田湖西北の秘湯も、従業員手作りの露天風呂があり、清潔感溢れるものであった。そこは芒硝重曹食塩泉であり、一貫堂処方のような贅沢な泉質であった。

湖畔の宿の個人客はわたしと、長逗留の若い男性のみであった。彼は近在の玉川温泉に治療に来ているという。癌患者かと女将に聞くと、神経病みらしいと答える。翌朝、八幡平の大パノラマに堪能していると、習志野ナンバーの車から中年男性が下りて来て、「いいですねー」と話しかけて来た。やはり玉川温泉に湯治に来ており、時々この辺をドライブしているという。湯治はいまだにこの国に息づいているのである。

近世、湯治の効能を最初に提唱したのは後藤良山である。その弟子、香川修庵も温泉論を展開している。薬物療法のみならず、地を汲み出すのではなく、地の利を生かした治療法に目を向けるのは、医者としての当為である。

良山と修庵は水治療法をも推奨している。他に、橋南谿、中神琴溪、伊澤蘭軒、田中適

* おおとも・かずお。医師。大友内科医院院長。埼玉県秩父市。

↘ 所、多紀元堅、平野革谿、佐藤方定、浅田宗伯らも、水治療法に注目している。特に、琴溪、元堅、革谿の治験は興味深い。彼らは、太古からの禊の効能に思いを致していたに違いない。水治療法の勧めなど、医業としては一文の得にもならない。漢方を始めたころ、甲田光雄先生の『断食療法の科学』という今では古典になっている本に出会い、「冷え性には冷水浴を」の一文にカルチャーショックを覚えた。現代漢

方でも学び得ないことであった。現在わたしは、起立性低血圧症や易感染性のある虚弱体質、皮膚病、心身症、アレルギーや膠原病（特にレイノー症状）に水治療法を勧めている。

旅から帰ると、注文していた野口順一著『皮膚病の温泉・水治療法』（光雲社）が届いていた。野口氏とは一面識もないが、東北大学卒業後、鳴子分院などに勤務しながら、40有余年にわたって、温泉療法に携わって来た方であ

る。あとがきに「曲学阿世の横行するこの医学会において、薬物治療などにできる限り頼らないようにして、本質的な水治療法を基盤とした診療を進めることができた」とある。東北の風土に馴染んだ、いかにも骨太な研究者を彷彿とさせる。

水と湯は、我が国で最も恵まれた資源である。この恩恵に浴さないでいられようか。

御手洗の 水も津軽の 湯も出でよ
深雪をうがっ ブナのぬくもり